

1. 私が、きょう、あなたに命じるすべての命令をあなたがたは守り行なわなければならない。そうすれば、あなたがたは生き、その数はふえ、主があなたがたの先祖たちに誓われた地を所有することができる。
2. あなたの神、主が、この四十年の間、荒野であなたを歩ませられた全行程を覚えていなければならない。それは、あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。
3. それで主は、あなたを苦しめ、飢えさせて、あなたも知らず、あなたの先祖たちも知らなかったマナを食べさせられた。それは、人はパンだけで生きるのではない、人は主の口から出るすべてのもので生きる、ということ、あなたにわからせるためであった。
4. この四十年の間、あなたの着物はすり切れず、あなたの足は、はれなかった。
5. あなたは、人がその子を訓練するように、あなたの神、主があなたを訓練されることを、知らなければならない。
6. あなたの神、主の命令を守って、その道に歩み、主を恐れなさい。
7. あなたの神、主が、あなたを良い地に導き入れようとしておられるからである。そこは、水の流れと泉があり、谷間と山を流れ出た深い淵のある地、
8. 小麦、大麦、ぶどう、いちじく、ざくろの地、オリーブ油と蜜の地。
9. そこは、あなたが十分に食物を食べ、何一つ足りないもののない地、その地の石は鉄であり、その山々からは青銅を掘り出すことのできる地である。
10. あなたが食べて満ち足りたとき、主が賜った良い地について、あなたの神、主をほめたたえなければならない。
11. 気をつけなさい。私が、きょう、あなたに命じる主の命令と、主の定めと、主のおきてとを守らず、あなたの神、主を忘れることがないように。
12. あなたが食べて満ち足り、りっぱな家を建てて住み、
13. あなたの牛や羊の群れがふえ、金銀が増し、あなたの所有物がみな増し加わり、
14. あなたの心が高ぶり、あなたの神、主を忘れる、そういうことがないように。——主は、あなたをエジプトの地、奴隷の家から連れ出し、
15. 燃える蛇やさそりのいるあの大きな恐ろしい荒野、水のない、かわききった地を通らせ、堅い岩から、あなたのために水を流れ出させ、
16. あなたの先祖たちの知らなかったマナを、荒野であなたに食べさせられた。それは、あなたを苦しめ、あなたを試み、ついには、あなたをしあわせにするためであった。——
17. あなたは心のうちで、「この私の力、私の手の力が、この富を築き上げたのだ。」と言わないように気をつけなさい。
18. あなたの神、主を心に据えなさい。主があなたに富を築き上げる力を与えられるのは、あなたの先祖たちに誓った契約を今日のおりに果たされるためである。
19. あなたが万一、あなたの神、主を忘れ、ほかの神々に従い、これらに仕え、これらを拝むようなことがあれば、きょう、私はあなたがたに警告する。あなたがたは必ず滅びる。
20. 主があなたがたの前で滅ぼされる国々のように、あなたがたも滅びる。あなたがたがあなたがたの神、主の御声に聞き従わないからである。

## 説教

申命記 8 章は、神がイスラエルを四十年も荒野をさまよわせた理由を、モーセが解説する場面です。

神は、約束の地カナンを相続させるために、ご自身の民イスラエルを奴隷の国エジプトから救い出されました。十戒を教えられたシナイ山からカナンの手前カデシュ・バルネアまでは11日間で行かれる距離でしたが、実際には四十年もかかります（申命記 1:2-3）。理由は、イスラエルの不信仰の故でした。エジプトを出た後、シナイ山を経てカナン（今のパレスチナ）に入植するまでわずか11日の距離ですが、自分たちの不信仰と不従順の故に、実に、四十年の歳月を要したのです。

ここでは、天に召される日を目前にしたモーセが、過去を回想し、総括しながら、あらためて主の教えをイスラエルの人々に教えます。四十年前に、不信仰で神を怒らせたあの世代の人々は、既に死にました。その時、神への信仰を貫いたヨシュアとカレブ、そして、モーセだけは生き残っていますが、モーセもまた、人々の不信仰のとぼっちりを受けて、カナン入植の悲願は叶えられず、今や天に召されようとしています。それで、続く後の世代のために、これまでの歴史を総括し、教訓として残さなければなりません。申命記はモーセの遺言なのです。

8章では「荒野の四十年」の意味が解説されます。「私が、きょう、あなたに命じるすべての命令をあなたがたは守り行なわなければならない。そうすれば、あなたがたは生き、その数はふえ、主があなたがたの先祖たちに誓われた地を所有することができる。」(1) 「荒野の四十年」の教訓として、まずは、神のすべての命令を守るよう教えられます。それにより、神が先祖に約束したカナンの地を「所有することができる」というのです。第一世代である彼らの父たちは、神の命令を守り行わなかったために、神の怒りを受けて、約束の地に入ることが許されませんでした。だからこそ、それを反面教師として、次世代は神のすべての命令を守り行わなければならないと言うのです。

同時に、モーセはこう教えます。「あなたの神、主が、この四十年の間、荒野であなたを歩ませられた全行程を覚えていなければならない。それは、あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。」(2) ここでモーセは「荒野の四十年」の「全行程を覚えていなければならない」と言います。その「荒野の四十年」は主がそう歩ませられたのであって、そこには神の特別な意図がありました。それは「あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった」というのです。「苦しめる」は「手荒く扱う、虐待する、謙らせる、酷く苦しめる、弱らせる」の意味で、「試す」は「試験する、試す」という意味です。つまり、神は、不信仰で不従順なイスラエルの民を「手荒く扱い、酷く苦しめ、謙らせる」ことで、彼らが神の命令を守るかどうか、「心のうちにあるもの」を知ろうとしたのでした。

順調な時にはいい顔をして、苦しい時には人はつい本音が出て、本性を現します。それで、苦しめて、その本音を知ろうというわけです。それも、一年、二年ではなく、四十年間もというのですから、「あなたがその命令を守るかどうか」を徹底的に知り尽くされることとなります。そして、イスラエルの民もまた、四十年間、毎年毎年、何も無い不毛の荒野で、苦しんで苦しんでひたすら苦しみながら、虚飾を剥ぎ取られ、無一物とされて、自分が神の命令を守るかどうか、神の前に徹底的に試されたこととなります。

とは言え、四十年間、全く何も食べられなかったわけではありません。神が特別に与えてくださった天からの糧である「マナ」を毎日食べて生きてきました。「それで、主は、あなたを苦しめ、飢えさせて、あなたも知らず、あなたの先祖たちも知らなかったマナを食べさせられた。」(3 節前半) この「マナ」は、全く何も無い不毛の荒野に於いて、朝ごとに神が天から降らせてくださった奇跡の糧でした。「マナ」のおかげで、イスラエルは荒野に於いても生きることができました。「マナ」は、苦しい四十年間、イスラエルを支えてきたいのちの糧です。

どうして神はその「マナ」でイスラエルを養われたのでしょうか。その理由をモーセはこう解説します。「それは、人はパンだけで生きるのではない、人は主の口から出るすべてのもので生きる、ということ、あなたにわからせるためであった。」(3 節後半) もしもイスラエルが普通に農作物を食べて生活したならば、不信仰なイスラエルの民は、それが神が与えてくださっている恵みの糧であることを忘れてしまったに違いありません。7~10 節では、カナン定住後の生活の豊かさが紹介されていますが、そこは「あなたが十分に食物を食べ、何一つ足りないもののない地」と呼ばれます(9)。そうすると、「食べて満ち足り、りっぱな家を建てて住み」、「金銀が増し、あなたの所有物がみな増し加わり、あなたの心が高ぶり、あなたの神、主を忘れる」危険性があると厳しく警告されています(12~14)。だからこそ、厳しい環境が彼らには必要でした。それは彼らの「訓練」のためです(5)。

荒野は何も無い、厳しい環境です。「水の無い、乾ききった地」です。のみならず、「燃える蛇やさそりのいる」所でした(15)。そのような極めて厳しい環境にあつては、高慢にも「この私の力、私の手の力が、この富を築き上げたのだ」などと自己満

足に耽っている余裕など少しもありません。なぜなら、毎日が格闘だからです。その日一日を生き抜くために、「日ごとの糧を今日も与えてください」と必死に神にすがりつかなければなりません。神の憐れみなくしては生きられません。それで、「マナ」が必要でした。それはひとえに、彼らの「訓練」のためでした。「あなたは、人がその子を訓練するように、あなたの神、主があなたを訓練されることを、知らなければならない。」(5) 四十年も苦しい思いをしましたが、終わってみたら「あなたの着物はすり切れず、あなたの足は腫れなかった」のであって、結局、「荒野の四十年」はひとえに彼らの「訓練」のためであったことがわかります(4)。何も無い厳しい状況で、誰が見ても直接神がくださっているとしか考えられない糧である「マナ」で養われることで、神の恵みを実感します。神が直接自分を養ってくださっていることを実感します。神が天からの糧である「マナ」で自分を生かして下さっていることを理屈抜きで実感するのです。そして、この日々の貴重な経験を通して、人のいのちを真に生かしているのはただ神であることを知ります。「人はパンだけで生きるのではない」のです。パンによって生かされているのではなく、ただ神によって生かされているのです。イスラエルが「良い地」であるカナンで「満ち足り」て生活するようになるのも、神が「先祖たちに誓った契約を今日の通りに果たされるため」に他なりません(18)。

「人は主の口から出るすべてのもの」すなわち神のことばが人を生かします。神のことばは人のいのちです。どんなに見た目は豊かな生活を送っていても、「あなたがたがあなたがたの神、主の御声に聞き従わない」ならば、「必ず滅び」ます(19-20)。反対に、今は荒野にいても、「あなたの神、主の命令を守って、その道に歩み、主を恐れ」るならば、「あなたがたは生き、その数は増え」、「主が、あなたを良い地に導き入れ」てくださると約束されます(1, 6-7)。つまり、神の命令を守るかどうかは、イスラエルにとっては死活問題なのです。

日々襲いかかる日常の厳しい現実の中で、目の前のことに惑わされず、その背後にいて一切を支配し、イスラエルを愛し、守り、助け、導いてくださっている神のことばに聞き従うことこそ、イスラエルにとってのいのちでした。神のことばに聞き従うことは、厳しい荒野の現実を生きのび、この上なく「良い地」であるカナンを相続させて、「あなたを最高にすばらしく幸せにしてくれる」唯一の道です(16)。「ついには、あなたをしあわせにするためであった」の「ついには」と訳される言葉は、「最後は、結末は」という意味です。「途中いろいろとあったけれども」、「紆余曲折を経て苦労したけれども」、それでも最後は「この上なく最高にすばらしい結末を迎える」というのでした。

後に、イエスさまは、40日間荒野で断食した後、「お前が神の子ならこの石をパンになるよう命じてみろ」と悪魔に誘惑された時、「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる』と書いてある」と申命記8章3節のことばでこれを撃退しました。全く何も無い不毛の「荒野」で、今や断食して餓死寸前という限界状況にあって、究極、人のいのちがただ神によることを明らかになさいます。「パンさえあれば幸せになれる、パンが自分を幸せにしてくれる」と、人類はパンに惑わされて滅びました。イスラエルもまたパンに惑わされて荒野を四十年彷徨いましたが、イエスさまは「人はパンだけで生きるのではない」と退けます。人が生きるのは単にパンによらない、人は神に生かされているのです。「荒野」に水を湧かせ、人にパンを与えて生かしているのは、神なのです。

それ故、人は神のことばによって生きなければなりません。神のことばは私たちのいのち、これこそ「荒野の四十年」の教訓なのでした。

あなたの神、主が、この四十年の間、荒野であなたを歩ませられた全行程を覚えていなければならない。それは、あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。それで主は、あなたを苦しめ、飢えさせて、あなたも知らず、あなたの先祖たちも知らなかったマナを食べさせられた。それは、人はパンだけで生きるのではない、人は主の口から出るすべてのもので生きる、ということ、あなたにわからせるためであった。(2-3節)  
このみことばの通りに、ただ神のことばによって生きる私たちとなるよう祈ります。